

東日本大震災時の大槌町の初動対応について

岩手県大槌町総務部

危機管理室 小笠原純一

2011（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災におきましては、全国の皆様から物心両面の温かい支援を賜り、生かされた側の12,255人を代表しましてこの場をお借りし、感謝させていただきます。本当にありがとうございました。

3月11日はもとより、月命日の11日は都度にあの光景と犠牲になられた方を偲び、安全で安心して暮らせる町づくりを進めることを誓い業務に向き合っております。今年7回忌を迎え、ひときわ心に強く意を決したところであります。

全国各地で災害が発生し、その度に悲しむ事が後を絶ちません。理想ではありますが、悲しみを生み出さない防災行政が進められますことを祈りつつ当時の状況をお話したいと思います。

災害発生当日

2011.3.11、午後2時46分。大きな地響きと共にゆっくりと円を描くような振れが始まった。

揺れ始めから間もなく照明が消え、停電になったことを知る。すぐさま後輩に学校の被災状況の確認と災害優先電話の機器を確認するよう指示し、他の職員と共に扉・窓を開放し、避難路を確保した。

窓から見える小槌川右岸の山の斜面が黄色い土煙を上げて崩落したのが見えたが、眼下に広がる街並みに倒壊した家屋は見られなかった。

津波の注意喚起を伝える防災無線が流れたが、間もなくしてけたたましいサイレンと共に「岩手県沿岸に大津波警報が発表」との放送が。班長（課長補佐）と「大津波って・・・」と言葉が続かないまま顔を見合わせた。そして、今まで経験したことのない想像できない事態が起こるのではないか。という目に見えない脅威を感じ、全身に鳥肌が立った。

時間の経過と共に街では自動車、自転車、徒歩と様々な手段で避難を開始し、騒然となっている。道路のあちこちではクラクションが鳴り響き、渋滞、混乱が予測できた。執務室下の道路に大槌小学校の校長先生を先頭に児童たちが集団で避難してきた。

「大丈夫ですか？」「大丈夫。児童全員で避難してきました。下校させる前だったからよかった」と、胸をなでおろす校長先生と会話を交わし、更に高い駐車場への避難を促す。

執務室の窓からは大槌湾が見える。北は赤浜の弁天島から南は小枕地区の港まで、その先には釜石市箱崎町、尾崎白浜まで。

職場に常設していた双眼鏡で班長と交互に小枕港の海面変動を注視していた。

後輩が戻ってきた。通話可能な電話機はなかった。NTTの予備電源が機能していない

のか。交換局がダメージを受けたのか、混線しているのか……。おもむろに携帯電話から町の災害対策本部へ連絡してみたが繋がらない。

15:00 すぎ。1 度目の海面変動

小枕港に係留していた船の高さが低くなった。引き潮が起こった。暫くすると水位が上昇し岸壁を超えた。

その光景は、昨年（2010 年）のチリ地震の潮位変動と似ていた。が、それ以上の水位の上昇はなかった。しかし、なぜか胸騒ぎが止まらない。「何かが来る」と直感し、携帯電話を手に取りもう一度、町の災害対策本部への連絡を試みた。

災害対策本部員は住民の安全を確認してから一番最後に避難するのではないだろうか、と思った。発災から 15 分が経過したが未だに公民館には避難してこない。

実家が役場の隣であった。鉄骨 3 階建。最悪の場合は実家の屋上に避難するよう、昨年のチリ地震の際にアドバイスをしていた。冷静に判断できればよいが。。だから何度も電話した。しかし繋がらない。

15:16 分頃。大海嘯が町を呑む

「ありやありやありや、これはマズイぞ」双眼鏡越しに海を眺めていた班長が叫んだ。肉眼でもその変化は分かった。係留していた船が横になっている。海底が見えるまでの引き潮。心臓が鼓動を速めた。「やばい」。瞬く間にどす黒い海面が上昇してきた。岸壁を超え、船は陸地に流れ、防潮堤の突端まで上昇したかと思うと、一気に超越、堤防際の軽自動車は流された。

町のあちこちでサイレンが鳴っている。消防車輻だろう。

湾際の小枕地区が浸水して間もなく、小鰐川沿いの須賀町の家が動いているのが不思議だった。それは津波によって建物ごと押し流されていることを理解するのに時間がかかった。

大槌駅の背後まで到達したが、止まる気配はなく、駅が流され、駅前通りが浸水していく。勢いを増した津波は公民館下のレンタルビデオ店を木端微塵にした。そして津波は川を遡上し更に奥地まで。

公民館下の道路に避難した住民の悲鳴で我に返った。「なんとかしねえば」

執務室から外に出た。避難した自動車が浸水した町方まで連なっている。避難した人は路上駐車したまま津波を眺めている。できる限り声を張り上げた「もっと上に避難してください」

後輩は津波の際まで降りて車内に取り残され住民を救出している。「自分の安全を第一に頼むぞ」と言い、上の駐車場に走った。

フェンス脇で流される家や車、人を見て泣き叫ぶ子供たちが大勢いた。校長先生に児童生徒を駐車場の中心に集めて点呼を取るようお願いした。残酷な情景は子供に見せた

くない。

北側直下のお寺から職員 OB が避難してきた。「たくさんの方が逃げ遅れて下にいる。年寄りもいっぺだ。はやく助けないと次の津波が来る」。付近の高校生と一般の人に声をかけ、救出をお願いした。タンカがないので、会議室から長机を出し、4人1組で行動するように指示した。

お寺の先には役場がある。津波によって破壊された家屋の埃塵でよく見えないが屋上に人影が見えた。少し安堵した。しかし、周囲は津波で2階まで浸水している。とても動ける状態ではない。「残されたオラ達でやらないと…」

倉庫から移動式の防災行政無線を引っ張り出した。これが動けば町内に情報を提供できる。八木アンテナを組み立てるが、一人では進まない。あまりのショックに呆然としている女子職員に「今動けるのはオラ達だけなんだ。まずはやんねえばないことをやっぺし」と怒鳴ってしまった。言った後でキツク言い過ぎた・・・と反省した。

アンテナを設置した頃には周囲は避難した人で埋め尽くされていた。このままでは収拾がつかない。

体育館の管理者に避難者収容のため施設開放の申し出をした。しかし「安全が確認できない以上は開放できない。」と断られた。

開放は一旦断念して防災無線の設置作業を進める。

南方のコンビニ付近で火災が発生した。流失した家屋に延焼し、上空はドス黒い煙が昇り、真っ白い雪が舞って不思議なコントラストだ。お寺から救出された住民は着の身着のまま。しかも津波で濡れている。このままでは助けた命が助からなくなる。

体育館の開放を再度申し出た。しかし、余震による倒壊の恐れが否めなく二次災害が懸念されるので許可できないとのこと。「助けたのに助からないのなら意味がない」と決断を迫りやっと入館が許可された。

かろうじて避難できた町保健師や女子職員に施設への誘導と処置をお願いする。

避難した人たちには濡れた者、津波を飲んだ者、怪我をした者がいた。保健師から救急箱を求められたが、役立つものは少なかった。施設脇の防災倉庫を探したが、毛布 50枚と薪ストーブとブルーシートとガソリンの入っていない発電機しかなかった。

体育館の収容人数は 860 人。それを超えて建物の通路まで人があふれてきた。

「毛布が足りない」、「菓が足りない」、「安否が確認できない」いろんな問題が出てきた。しかしどうにもできない。「今やるべきことはできる限り生きている住民を生かすことだ」後輩の職員たちには「どんなことをしてもいい。自分で考えて行動してくれ」と伝えることしかできなかった。

防災行政無線は設営できた。しかし、肝心な電気がない。

可搬式の発電機があったがガソリンが腐敗しているのか起動しない。

そこに避難してきた町内の自転車店主や電気店主や自動車整備工が避難所運営の協力を申し出てくれた。

まずは電力を確保することを目標としてそれぞれの技術をフルに活かしてもらうようお願いした。

女子職員を集めて、調理実習室にある容器に水を確保するようお願いした。もちろんトイレには「流さないで」の張り紙も貼った。

18:00 漆黒の闇と真紅の炎

避難した人たちは体育館に収容した。収容しきれない人は通路に蹲っている。

外は真っ黒。時折、プロパンガスのボンベが爆発する度に轟音と真っ赤な火柱が施設の中を照らした。

「今のままではだめだ。」体育館の施設管理者に応急的に災害対策本部を設置することを申し出た。

集まれるだけの職員を集めて意見交換を行った。「教育委員会の身分で本部の業務をするのは如何か」、「本部が被災して機能しないなら自分たちがやるべき」と様々な意見が出たが、①本部職員が来るまでの応急的な本部機能の代行とすること。②自分の安全を第一に確保して行動すること。③組織が機能していないので指示は班長から受けること。④マニュアルや事例はないので、個々に必要とするものを考えること。を条件に設置することになった。

19:30 火の猛威が迫る

火災の延焼が収まらない。眼下の小学校付近まで火の手が迫ってきた。公民館脇の道路には避難した車両が。引火したら危険度は増す。

班長以上が集まって対応を考える。津波による被害が把握できていないが、このままでは施設まで延焼する可能性がある。

出た結論は①自動車で避難した人は林道を通り山間部へ移動してもらう。②混乱を避けるために自動車以外で避難した人はそのまま残ってもらう。

しかし、避難住民に伝えるには声しかない。何度も念を押すが「ここもだめだ」感が広がる。次々と林道を歩いて避難する者が出、走る車に飛び乗る事態が生じた。

年寄りから「白湯が飲みたい」と申し出があったが、お湯は作れない。乳児を抱いた若い母が調乳したいお湯を求めてきた。さすがに断れないので、電気ポットに残っていたお湯をこっそり分けた。

みんながここにいられない。



20:00 決死の移動

足りない毛布の代用に誰かが発案したのだろう。体育館の暗幕を引き裂き、個々に寒さをしのいでいた。

白湯の件もあるが、暖房がない施設に濡れたままの状態では限界がある。

2回目の班長会議。避難弱者をどうするかだ。

懐中電灯は電池がなく使えないので、調理室からサラダ油を醤油皿に入れ、半紙で芯を作り蝋燭を仕立てた。

山間部の障がい者施設や老人施設までは被災していないだろうから引き受けてもらうしかない。教育委員会の車両を使って避難弱者を移送することにした。

しかし、背後の山は延焼により火の海な状態。安全を確認しつつ移動することを条件に行動を開始する。併せて清掃事業所にトラックがあるのを思い出し、車両の確保も実行。これで2トン車と4トン車を持ってきた。

20:30 情報発信

車のラジオで情報収集していると、大槌町だけ状況が伝わっていないことが分かった。これでは支援のしようがない。職員の一部が衛星携帯電話の存在を思い出した。探したら書庫の一番奥に眠っていた。電源を入れるも入らない。充電されていない。電気がないことには使えない。

山間部の金沢支所なら被災していないだろう、ということで金沢支所に向かう。

支所には50人程の避難者がいた。5分団3部の団員が発電機を使って周囲を照らしていた。その電源を借りて衛星携帯電話を起動。県庁に連絡するも・・・混線で繋がらない。

後輩が機転を利かせてNHK盛岡放送局に県庁への伝言を依頼する。

帰り際の車内でラジオから大槌町の情報が流れた。「大槌町は壊滅状態」。情報が正しく伝わっていない。翌日から行方不明者の読み上げに自分の名前を聞くことになる。何度も。

21:00 火を制す

火災は施設の直前まで迫ってきていた。窓越しでも顔が火照る。なんとかしなければ。

避難してきた大槌消防署消防係長に対策を相談する。係長の指示で若手の職員を集めた。自動販売機脇のゴミ箱からペットボトルを集め、汲み置いていた貴重な水を詰めた。水の入ったペットボトルを両手に持って道路脇に並べた。

気持ちが逸る。だが、まだ我慢。まだ我慢。まだ我慢。

消防係長の号令で一気に水を放つ。しかも火の元ではなく、足元に。

「消火とは火を制すること」の言葉に心が震えた。

22:00 電源確保

前年度に整備した体育館脇の発電機が稼働した。そこで防災行政無線も使用可能に。情報は県警本部から入電する警察無線やラジオからだ。宮古地区などの潮位変動の放送に合わせ、サイレンと注意喚起を続けた。

子局のバッテリーの限界もあり、どの程度情報が伝わるか分からないが、できる限りをやろう。これで一人でも助かるのなら。

体育館に避難した母親の姿がない。あれだけ残るよう伝えたのに、安否を確認したいが、連絡手段はない。それより目の前にいる住民を守らないといけない。親には申し訳ないが脳裏から消して、執務室に戻った。

22:00 避難所の確認

避難弱者の移送も完了し、とりあえずは夜明けを待つこととなった。頑張った後輩たちに漬物用の塩を渡す。塩分摂取は大切。

若手職員を先に休ませ、後輩1名と浸水範囲と避難所の確認のため巡回することとした。現有車両の燃料は残り少ない。小隊で動くのが適と判断。

大槌高校に 740 人程

大ヶ口集会所に 50 人程。外でたき火をしている。

かみよ稲穂館に 70 人程。付近の住民からいただいた毛布で就寝していた。

対間地区集会所に 30 人程。隣家の奥さんが炊き出しをしてくれていた。

金沢小学校に 73 人程。海水を飲んだ子供が嘔吐と発熱。

金沢支所に 100 人程。既に就寝中。

そのまま町方へ移動。

迫又地区の広場に町消防団の本部長が 5 分団の中隊と共に警戒待機していた。

これ以上は町方には行けないとのこと。材木が道路をふさいでいる。

というか、ここまで津波が来たということが信じられなかった。

大ヶ口地区も酒屋付近まで浸水跡あり。源水川から先へは進めない。

23:00 近隣の恩

釜石市から峠を越えて釜石消防署員が来た。釜石市災害対策本部から支援を預かってきたと米 60kg を受けた。

しかし、ガスが出ない。ガス会社で働く人が協力してくれて復旧できた。朝になったら住民に食べさせられる。と、みんなで泣いて喜んだ。

必要なのは炊飯に要する水。汲み置きの水だけでは足りない。

2 トン車にバケツを積んで水道事業所に向かう。と、事業所に明かりが。。。

施設は浸水したものの、取水は井戸水。自家発電が被災していなかったのも、所長の判断で給水を継続しているとのこと。

帰り際、警戒している5分団の中隊に水道が機能していることを告げ、帰ろうとした時、自衛隊のジープに止められた「災害対策本部はどこですか？」

水を満載した塵芥収集トラックが先導し、自衛隊が町に来た。

災害発生二日目

殆ど眠れなかった。職場の仲間、友達、家族。いろんな顔が目の前に現れてくる。普段執務している机の隙間に着の身着のままの状態で見舞われているだけ。鉄筋は床から冷える。そして眠りの闇に包まれる頃にボンベの爆発音で目が覚める。

今日は早朝からヘリの轟音がなり響いている。これほど自衛隊が心強いと感じたことはない。

朝から自分たちに課せられた任務は、遺体収容だった。

夜明けとともに各避難所の境界を住民が歩き、ご遺体を収容してくれた。しかし、生きれた者と生きれなかった者が同じ部屋にいるのは辛いだろう。と収容することに。

ブルーシートとリボンテープを持ち6人態勢で避難所に向かう。

最初の施設は7体。布団ごと運ばれていた。両手を天にかざしたまま、何を掴もうとしていたのか。家人が不在で自力では避難できなかったのだろう。想うときりがない。「ぐっ」と、気持ちを飲み込んだ。皆で合掌しシートで包み、荷台に乗せる。見送る住民は合掌し集まっている。無表情のまま黙礼し出発する。警察官に遺体収容の見立てを協議する。勤労者体育館の遺体収容可能見込み数は150体。今後は100体/日を超える可能性が高い。次の安置所をどうするか・・・そして、これがいつまで続くのか。

午後1時。教育長が部屋に飛び込んできた。地震直後に周囲の制止を振り切り役場の対策本部に向かったが無事だった。続いて本部の職員や本庁の職員も入ってきた。

共に抱き合い、生きて再会できたことを喜び合う。しかし、彼らの様相は過酷な状況を物語っていた。

疲労困憊な状態で任務を引き継ぐことは不可能だと思っていたが、本部員の士気は高かった。

後輩が事務室に来た。「遠野市から灯油の支援がきました」との報告

駐車場に出ると「災害支援」という横断幕のトラックがいた。遠野市の職員だった。市長の陣頭指揮の下、住民みんなで一晩中おにぎりを作ったとのこと。必要なものは何でも調達してくれるとのこと。ありがたい限りだ。

停電により市内のスタンドが機能しないため、大量に確保できないが、市役所の灯油を分けていただけると申し出があった。深夜に後輩2人と遠野市に向かう。

庁舎の一角に「対策警戒本部」が設置され、24時間体制で支援をしてくれていた。

テレビに映し出される各地区の状況に被害の大きさがとてつもなく大きいことを知らされる。帰り際、携帯の電源を入れてみた。アンテナが3本。「つながる」

途端に、メール受信が自動起動。いつまでも受信。。。受信件数 200 件までカウントしてバッテリーがなくなった。結局誰にも連絡することができずに早朝に帰所。

災害発生三日目

本日から「遺体収容班」「安否確認班」「避難所管理班」「本部」に分かれた。

大型の免許を持っていたので、輸送部門を担当。日中の殆どはご遺体の収容を行う。そして夜はバケツを積み飲料水の確保に走る。また、時折、物資を運ぶ1日が始まる。避難所としていないはずの吉里吉里中学校から連絡があった。避難者がいる。

現場に向かうと 60 人程の住民を副校長が献身的に対応してくれていた。

聞くと、山田町田の浜地区の住民とのこと。半島の集落が津波で孤立した所に自衛隊が救出、降下地点がないため、中学校の校庭で下されたとのこと。

食料に関しては、授業で使った残りの食材があるので問題なさそうだが、慢性疾患の方が大勢。菓を要望されたので、メモに書き写す。ランタスヒューマグワーフアリンリマチルスルピリドニバシールコンスタンノルペースカプセルアダラートメルビン…。

本部に戻って衛星携帯電話で県災害対策本部へ要請するも音質が悪く伝達できない。困った。

震災発生後四日目～1か月

引き続きご遺体の収容。と共に、未だに見つからない仲間の捜索も進める。途中でお世話になった住民の顔を見つけては心が苦しくなった。色々声をかけてあげたかったが、思いに浸る時間はなく、気持ちを呑みこみ業務を進める。

確認できた避難所、避難場所は 40 か所。避難者は 6,420 人に挙げた。支援物資の品目が増えると共に求められる品目も増えた。公民館の会議室では収容しきれなくなったので、寺野地区に物資テントを設置することとなった。

ご遺体の捜索と搬送は大阪府内の消防広域援助隊と自衛隊に移管された。

物資の中に携帯電話のソーラー充電器が届いた。ほぼ同時に大槌高校避難所に携帯の中継車が配備となった。しかし、日中は混線でつながらないため、深夜に電話をする。

ある程度充電ができたので、公民館の外に出て、焼け野原となった街が見える丘で久しぶりに携帯に電源を入れた。

メールの殆どは安否を心配して何度で電話してくれた親戚や仲間だった。「生きてるって何度も言ってるのに…」とつぶやき。目を閉じた。

翌朝、釜石市で災害対策燃料の供給を開始するとの情報を得て、トラックにドラム缶を積んで向かった。

新人が釜石で務めている父親に会いたいと申し出があったため、市内の駐車場で 10 分だけ時間を与えることとした。父親もまた市内の学校で避難所運営に尽力していた。

大の大人、男が抱き合うのを恥ずかしいと思ったが、今度ばかりは感動して泣けた。



その待ち時間に1か所だけ連絡をした。自治労連岩手県本部の渡辺書記長の携帯だ。書記長は間髪入れずに「生きていたか！！」と言い、冗談も言えず「なんとか」としか言えなかった。

とりあえず生きている仲間を生き続けさせたい思いから、書記長には職員のための支援をお願いした。自分たちが倒れたら誰が住民を支えていくのか。。

労働組合は翌日から連日、様々な物資を届けてくれた。自分たちの足で駆けずり回って買い付け、集め、運んできてくれた。その全てに「がんばれ」のメッセージが書いてあった。

震災発生後1か月～

後に地元セルフスタンドから地下タンクにある燃料の寄附の申し出があり、危険物の資格を持っていた私は燃料部門を任せられることとなった。

その頃は、本部も含めた執務室は大槌小学校校庭に整備したプレハブ庁舎に移管したが、自分はスタンド脇のプレハブに発電機を繋げて、燃料の配給統制を行う。

当初は、避難所へは灯油、緊急車両にガソリン、建設業者には軽油を供給。

燃料供給が安定した頃はスクールバスや塵芥車、町外の火葬場に向かうご遺族の車に。避難所への灯油は仮設住宅が整備され、避難所が閉鎖される7/31まで続いた。



今後の課題として

全国の皆さんからの暖かい支援によって助けられました。

19年前の阪神淡路大震災の時は総務課で災害対策本部員でした。あの当時は支援物資が制限され、大槌町は毛布しか支援することができませんでした。

山間地区で毛布の受付をしていた時、おばあさんが米を持ってきてくれた。「困っているのは寒さだけじゃないだろう。少しだけど届けて欲しい」と言われましたが、割当があることを説明して持ち帰らせてしまいました。

今回の震災で全国の皆さんから手厚い支援を受ける度に「自分達は支援を受けるだけの支援をしてきたらどうか」と悩みました。大阪から派遣で来ていただいた同志は「困っているのは皆同じ」と励ましてくれました。

今回の震災で一番困ったことは、仲間が大勢亡くなったことです。応急対応するにも指示をする上司も、助言をくれる先輩もいなく、ましてや書類のない中で、まさに暗中模索の中での作業でした。

避難所で住民から「役場の職員が死んでどうする。自分たちは誰に文句を言い、誰を頼ったらいんだ？」と言われました。

ふと感じたことは、災害時の対応については机上のマニュアルがあるものの、現場に対するマニュアルは自治体は持ち合わせていない。と。

生死と隣り合わせの消防や警察、自衛隊は身の安全に第一に業務に取り組みますが、事務方の自治体職員はその知識はなく、現場や危険地帯に赴くことは自らの命を落としかねないことだと。

自治体職員が避難することは住民から批判されかねますが、避難所運営や物資の手配、住宅の再建、産業の再生など、地域や住民と密接に関わる自分達だからこそ、一番先に身の安全を確保すべきだと思います。

最後になりますが、慌ただしい応急対応の中で、自分の必要な事や物も儘ならない状況の中で、自治体職員の仲間のサポートはととてもありがたく、この組織があったからこそ。我々は自治体職員として任務を全うできたと言っても過言ではないです。

本当にありがとうございました。